

36	徳島県立海部高等学校	全日制	普通科	26～28
----	------------	-----	-----	-------

平成28年度 個々の能力・才能を伸ばす特別支援教育

研究開発実施報告書（要約）

1 研究開発課題

高等学校に在籍する障がいのある生徒の自立と社会参加を図るため、特別支援学校や発達障がい者総合支援センター等の関係機関と連携し、自立活動を取り入れた特別の教育課程の編成及び得意分野を伸ばす教科学習と進路支援の充実に関する研究。

2 研究の概要

本校で支援の対象となる生徒は、周囲とのコミュニケーションなどの対人関係の困難さを示すことから、自立活動領域の「人間関係の形成」や「コミュニケーション」「心理的な安定」に重点をおいた内容を中心に、2単位時間（年間70時間）を新たな教育課程として編成した。その際、個々の生徒については、特別支援学校、発達障がい者総合支援センター等の協力を得ながら、個別の指導計画、個別の教育支援計画を作成し、それに基づく指導や評価方法について研究を進めた。また、学習場面等において、複数の指示を聞くことが難しく周囲の状況把握に困難を示す生徒に対しては、一斉授業での板書や指示の工夫を行うとともに、特別支援教育指導補助員による個別支援等を行い、教科指導をとおして個々の能力を伸ばす指導を実施した。さらに、関係機関と連携し、将来を見据えた就業体験等を実施し、社会性を育むことで、適切な自立や就労支援方法について研究を行った。

3 研究開発の目的と仮説等

（1）研究開始時の状況と研究の目的

本校は、徳島県南部の高等学校で、普通科・情報ビジネス科・数理科学科を設置し、1学年の生徒数が約130名、総生徒数390名ほどの中規模校である。普通科のある高等学校が周辺にはないため、地元の中学生のほとんどが本校に進学する。そのため、毎年、生徒の学力には大きな差があり、特別な支援を必要とする生徒が各学年に複数名在籍している状況がある。

生徒の中には、障がい等の特性のため、対人関係がうまくとれず、コミュニケーション能力も未熟なため、集団に溶け込めずに自尊感情が低下したり、通常の一斉指導に適応できず、学力不振に陥ったりする生徒もいた。また、生活体験が乏しく、消極的な生徒が多かった。いずれも従来の教育課程や教育方法では、本来持っている能力を十分に発揮できないことから、障がい特性に応じた教育課程の見直しによる、個別指導や小集団でのコミュニケーションスキルの獲得、学び直しによる基礎学力の向上、一斉指導の中での個々の能力や特性に応じた支援の充実等、生徒に応じた教育環境の整備を図ることが喫緊の課題となった。

平成26年度に実施した実態調査でも、友人関係の持ち方が苦手で孤立しやすかった

り、他者とのコミュニケーションが上手くいかず、ストレスやトラブルにつながったりといった「社会性」に関する部分で、コミュニケーションが上手くいかずに孤立したり、ストレスを抱え、友人同士のトラブルにつながったりしやすい生徒が多く挙がってきた。また、平成28年度の実態調査では、「感情のコントロールが上手くできない」という項目で各学年数名の名前が挙がるなど、単にコミュニケーション能力の問題だけでなく、自己理解、自己コントロールを課題とする生徒も増えてきている。

また、学習に関しては、読みとぼしや読み間違い、写し間違いといった「読む」「書く」スキルに関するもの、一度に複数の指示が聞き取れず混乱するといった「聞く」スキルに関するもの、これらが本校の生徒の課題として挙がってきた。

これらの課題を踏まえ、特別支援学校の自立活動の領域の中で、特に「人間関係の育成」「コミュニケーション」「心理的な安定」に重点を置き、個々の生徒の特性に応じた学習支援や生活支援を行うことで、生徒の学習上又は生活上の困難の改善や克服をめざすとともに、個々の能力・才能を伸ばし、将来の自立と社会参加へつなげることを研究の目的とした。

(2) 研究仮説

障がい等の特性のため、対人関係がうまくとれず、コミュニケーション能力も乏しく、集団に溶け込めずに自尊感情が低下し、本来の能力が発揮できない生徒に対して、教育課程の中に、特別支援学校の自立活動領域の区分である「コミュニケーション」「人間関係の形成」及び「心理的な安定」に重点をおいた「キャリアデザイン」を2単位時間開設することで、支援の必要な生徒が本来持っている能力を発揮し、学力だけでなく社会性やコミュニケーション能力を向上させることを期待した。

また、「キャリアデザイン」を週時程内に1単位時間、週時程外に1単位時間設定し、週時程外の1単位時間については、長期休業中に就業体験や模擬面接会等を半日から1日単位で実施することにより、体験的な学びの場の中で、将来の社会生活や職業人として必要な社会性やコミュニケーションスキルを身につけることをめざした。そして、今まで十分でなかった学習についても「キャリアデザイン」等の指導と関連づけて、丁寧に聞き取ったり、自分の言葉で発言する機会を多く持ったりすることにより、基礎的な学力が向上し、自信を持って学校生活を送ることができるようになることを期待した。

さらには、いずれは社会で必要となる面接でのマナーやビジネスマナー、社会人としての礼儀等を学校生活の中でいち早く学んでおくことで、自信や自尊感情の高まりへとつながり、社会への道筋がつくられることを期待した。

(3) 教育課程の特例

- ・授業時数の変更の程度・・・2学年で2単位時間の増加（年間31単位+2単位）
3学年で2単位時間の増加（年間31単位+2単位）
- ・この授業については、希望者が選択できるように授業時間は他の授業が終了した時間帯（つまり他の生徒が6時間授業の場合、7時間目に設定する）こととした。

教育課程の特例の内容	指導内容	授業時間数・単位数等
・新たな教育課程として、「キャリアデザインA」(2年生)「キャリアデザイン	・「キャリアデザインA」「キャリアデザインB」の主な指導内容については、次のとお	・2年次・・・2単位 (年間70時間)

<p>B」(3年生)の授業を設定した。</p> <p>・本校で特別な支援を必要とする生徒の多くが、コミュニケーションをとることや人前で話すことが苦手であり、生活体験が少なく、社会に出るにあたって多くの不安を抱えていた。また、感情のコントロールが難しく、友人間でのトラブルを引き起こしてしまう生徒もいる。その中には、就職を希望する生徒が多かった。そこで、「自立活動」領域の6区分の中から「人間関係の形成」「コミュニケーション」「心理的な安定」の内容を中心に、将来の社会的自立や就労に備えた実践を取り入れた学習を行った。</p>	<p>りである。</p> <p>「キャリアデザインA」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他者紹介 ・ビジネス電話マナー ・職場体験 ・職場体験報告会 ・上手な断り方・謝り方 ・ストレスマネジメント <p>「キャリアデザインB」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自己紹介 ・ビジネス電話マナー ・職場体験 ・就職面接会 ・ストレスマネジメント ・社会人のマナー ・お金を使い方 	<ul style="list-style-type: none"> ・3年次・・・2単位(年間70時間) ・週時程の授業は1単位時間 ・残りの1単位時間は週時程外として長期休業中に行い、職場見学や職場体験、模擬面接会等の体験的な活動を実施した。 ・選択制のため、受講生は他の生徒より学年で2単位増となった。
--	--	--

(4) 個々の能力・才能を伸ばす指導(現行指導要領における一斉指導の改善工夫等)

障がい等の特性のために、通常の一斉指導に適応できず、自尊心が低下し、学力不振に陥る生徒については、生徒の特性を全ての教員が共通理解し、生徒の苦手さや特性に応じた対応ができるようにしていった。初年度より実施してきた学校生活チェックシートによる実態把握とともに、昨年度より取り組み始めた社会性スキルアンケート等も継続して実施した。そして、さまざまな角度から生徒理解に努め、学習指導方法の見直しを図った。本校は視覚的提示が記憶に残りやすい生徒が多いため、口頭のみでの指示にならないように努めるとともに、メモや付箋を活用して指示を出したり、板書の仕方、補助教材の選択を工夫したりした。また、色の区別がつきにくい生徒がいる学級では、指定された色のチョークしか使わないよう教科担任同士で共通理解を図った。また、支援を必要とする生徒にとって有効なことは、他の生徒にとっても有効であることを根底に置き、授業改善を図っていった。

支援を必要とする生徒が在籍する学級での一斉授業に関しては、特別支援教育指導補助員を配置することとした。特別支援教育指導補助員はノートイクなどの支援や個別に注意を促したり、教員の指示伝達を行ったりした。また、整理整頓が苦手な生徒に対しては、ワークシートの管理や環境整備に対する声かけを行った。それに加え、担当教員が、板書と説明とを分けて行うことや、生徒自身が自分で考え、動くことのできるような指示の出し方等にも工夫した授業展開を心がけた。また、学級担任は、生徒が授業に集中できるよう、前面黒板周りには何も掲示しないようにする等、教室環境の整備に努め、ユニバーサルデザインを取り入れた学級づくり、授業作りを、学校全体で行うよ

うにした。

他者とのコミュニケーションを苦手としている生徒に対しては、少しでも他の生徒と話す機会を設けるようにし、一斉授業の中でペアやグループでの調べ学習や意見交換の場を設定し、他者との対話から考えを深められるようにした。また、どの生徒にも、プレゼンテーションする機会を設け、有効な人間関係を築きながらコミュニケーション能力や社会性、自尊心を向上させることをめざした。

生徒の個性を伸ばす指導として、意見発表の場を多く設けた。意見を述べたり、意見を書いたプリントを印刷・配付したりし、自分の意見が他の人にも伝わるような工夫を行った。友人からの感想も周知し、一つの物事を多角的に捉えることができるようにした。また、タブレット端末やパワーポイント等のICTを活用して授業を行うことで生徒の興味・関心を引き出していった。生徒自身がICTを活用して発表を行うことで、発表に対する苦手意識も薄まり、より効果的に発表することができるようになった。生徒の興味関心を喚起する授業づくりを心がけることで、少しずつではあるが、生徒の能力を引き出せたと考えられる。

○指導方法と教材

(国語)

- ・ファイルを活用してプリントの整理をさせた。ワークシートで流れを把握できるようにし、ワークシートは整理しやすいよう、A4サイズに統一した。
- ・プリントは1時間に1枚で収まるようにレイアウトを工夫した。
- ・筆者の意見にもとづく身近な例を考え、ペアで意見を交換し、発表した。
- ・和歌の文法、現代語訳、解釈、鑑賞文をグループで作成し、生徒たちが授業を行った。
- ・短歌や俳句等の創作活動では、単元終了後に作品集をつくり、生徒に配付した。

(数学)

- ・生徒の実態に合わせてヒントを出し、生徒が解決方法を発見できるようにした。
- ・グループ学習を導入し、生徒同士がお互いに教え合う場面を増やした。
- ・確率の学習で、実際にサイコロや割り箸、コイン等を使って一覧表にまとめた。
- ・関数ではGrapes(数学用ソフト)で紹介し、視覚的に理解しやすいようにした。
- ・図形と方程式では色画用紙等で図形を示し、生活に即した事例で説明した。

(社会)

- ・板書が長文にならないように心がけた。
- ・机間巡視を増やし、一人一人に対応した。
- ・暗記にとどまらず、太閤検地等では算数も取り入れ、総合的な理解をめざした。

(理科)

- ・板書は1時間に黒板1枚にまとめるようにした。
- ・ビデオ等も活用し、ビジュアルからの理解も図った。

(英語)

- ・生徒の実態に合わせてワークシート等を作成した。
- ・ディベートを取り入れ、根拠にもとづく意見を述べる指導を行った。
- ・ALTとのチームティーチングの授業時にはクイズ形式や英語でのロールプレイングを導入し、苦手意識を軽減できるように工夫した。

(保健)

- ・生徒自身に教科書の要約させ、プレゼンテーションさせた。

(家庭科)

- ・外部機関（保健所）と連携して出前講座を実施した。
- ・家庭科技術検定にチャレンジさせ、一人一人に目標を持たせた。

(音楽)

- ・実技では検定方式を取り入れ、1つクリアできたらシールを貼り、生徒が達成感を持てるように工夫した。
- ・ICT機器を活用し、様々な時代、様々な地域の多様な音楽に触れることが出来るようにした。

(美術)

- ・タブレット端末を活用し、写真を撮って加工し、それを切り絵にして作品として仕上げた。
- ・自分の作品について、自分の言葉で解説を行ったり、学級や学年を越えて作品の品評会を行ったりした。

(書道)

- ・印の袴（カバー）を作る際、手元や手順の写真を拡大して黒板に提示する等、視覚的提示を増やした。

(共通)

- ・授業のスケジュールと目標を提示したり、タイマーを活用したりした。
- ・生徒にホワイトボードを使って、自分の意見等を発表させるようにした。

○授業形態

- a グループ学習
- b ペア学習
- c 生徒の理解の状況に応じて習熟度別授業やチームティーチングを設定した。

(5) 研究成果の評価方法

- ・障がい等の状態に応じた特別な指導や、個々の能力・才能を伸ばす指導について教員対象にアンケートを実施しての評価
- ・キャリアデザイン等の授業を受けた生徒への聞き取りやアンケートによる評価
- ・個別の指導計画による評価
- ・保護者へのアンケートによる評価
- ・運営指導員による授業見学等による評価
- ・教員（担当教員以外）による授業見学、生徒の発表会見学等による評価
- ・研究成果報告会での参加者アンケートによる評価

4 研究の経過等

(1) 教育課程の内容

「自立活動」領域の中から「心理的な安定」「人間関係の形成」「コミュニケーション」の内容を中心に、将来の社会的自立や就労に備えた実践を取り入れ、「キャリアデザイン」の授業を開設した。2年次で「キャリアデザインA」、3年次で「キャリアデザインB」を各2単位ずつ設定し、週時程の授業は2年次が水曜日の7時間目、3年次が金曜日の7時間目に開講し、残りは週時程外として長期休業中に就業体験や模擬面接会等の

体験的な活動として実施した。受講生徒は平成28年度は、2年生が7名、3年生が11名であり、少人数でのグループ学習や個別の指導を行うため、ティームティーチングで実施した。また、選択制の為、受講生徒は他の生徒よりも各学年とも2単位増となった。

(2) 全課程の修了認定の要件

「キャリアデザインA」「キャリアデザインB」ともに70単位時間のうち3分の2以上の出席で単位を認定した。ただし、この「教育課程の特例」による「キャリアデザインA」「キャリアデザインB」の授業が、他の生徒が履修する単位よりも多くなるという点、そして、内容が本人の障がい特性に応じて、将来の社会参加や自立を目的としている点から、卒業単位に含めることは授業選択生徒にとって負担増になるということで、単位としては修得するが、卒業単位には含めないこととした。

(3) 研究の経過

	実施内容等	
第1年次 (H26年度)	・特別な教育課程の編成準備 ・生徒の現状及び課題の把握	・校内支援体制の機能強化
第2年次 (H27年度)	・特別な教育課程の実施 ・生徒の支援の充実	・校内支援体制の充実
第3年次 (H28年度)	・特別な教育課程の評価・検証 ・生徒の支援の評価・検証	・校内支援体制の評価・検証

(4) 評価に関する取組

	評価方法等	
第1年次 (H26年度)	・特別な教育課程の編成準備について ・生徒の現状及び課題の把握について	・校内支援体制の機能強化について
第2年次 (H27年度)	・特別な教育課程の実施について ・生徒の支援の充実について	・校内支援体制の充実について
第3年次 (H28年度)	・特別な教育課程の評価・検証について ・校内支援体制の評価・検証について ・生徒の支援の評価・検証について	

※詳細は、「3年間の主な取組み」参照

○3年間の主な取組み

研究内容（事業内容）	評価（事業の成果）
○入学生について、中学校からの引き継ぎと聞き取り調査を行った。その後、職員会議で共通理解を図った。	○事前に中学校からの引き継ぎを行ったことで、教員が共通理解をした上で入学生を迎えることができた。 ・引き継ぎ希望用紙 回収率 100% 引き継ぎ希望中学校数 平成27年度 1校/16校 平成28年度 2校/18校 (郡内の中学校については生徒課主催の中高連絡協議会)

<p>○キャリアデザイン受講生とその保護者を対象に「社会性スキルアンケート」を実施した。</p>	<p>○社会性スキルアンケートでは、学校では見えない生徒の実態や保護者のニーズを把握することができた。</p> <p>○社会性スキルを高める授業内容を計画する際の参考になった。</p>
<p>○運営指導委員会</p>	<p>○大学・地域若者サポートステーション・発達障がい者総合支援センター・特別支援学校（巡回相談員）から校外運営指導委員を迎え、それぞれの立場から助言を得たことで、研究の方向性が明確になった。</p> <p>○「キャリアデザイン」の授業の参観や、ビデオ等での生徒の観察により、支援の必要な生徒について適切な授業展開や支援がなされているか、評価を行った。</p> <p>○教員主導の授業展開になりがちであったが、生徒が自分で考え、動くことができる仕組みが必要との指摘を受け、生徒が準備から片づけまで主体的に動き、かつ自分の思いや意見を表出できるような授業展開へ改善でき、PDCAサイクルが上手く機能した研究となった。</p>
<p>○「自立活動（キャリアデザイン）」について</p>	<p>○人間関係の形成について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ペアワークやグループ活動を多く取り入れ、対話を通して良好な人間関係を形成する機会を設けた。 ・発表会やプレゼンテーションでは準備、片付けを含め全員で協力して運営にあたることができた。 <p>○コミュニケーションについて</p> <ul style="list-style-type: none"> ・職場体験を通して、職場におけるコミュニケーションを実践的に学ぶことができた。 ・社会生活の場面を設定し、ロールプレイングを行うことで、その場にふさわしい発言を体験することができ、コミュニケーション能力を高めることができた。 <p>○心理的な安定について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ストレスマネジメントに取り組み、日頃気づかないストレスと向き合い、自分のストレス傾向を知ること、ストレスとつきあう方法を学ぶことができた。 ・認知を変えること、アサーティブな言い方をすることなど、ストレスを軽減できる方法があることを知り、ストレスを感じたときの選択肢の一つとすることができた。 <p>○社会性スキルトレーニング</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「お金の使い方」「お茶の入れ方」「目的地までの行き方」「冠婚葬祭」「敬語の使い方」等について学ぶことで、生活の仕方や社会でのマナーを知ることができ、社会的スキルを身につけることができた。 ・「知っている」「できる」ことが増え、生徒の自信へと繋げることができた。
<p>○校外への啓発 ・「徳島県発達障がい教育研究</p>	<p>○平成27年度には、県内外の教員70名が参加した「徳島県発達障がい教育研究会」で、本事業について発表を行</p>

<p>会」での発表</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究成果報告会の開催 ・他の高等学校での、自立活動の内容を取り入れた授業の実施 	<p>い、助言者や参加者から助言や意見を得た。</p> <p>○平成28年度には、本事業の研究成果報告会を開催し、教育関係者約60名の参加者を得ることができた。また、校外運営指導委員の方々と「高等学校の特別支援教育のこれから～社会的自立をめざして～」と題し、パネルディスカッションを行い、高等学校における特別支援教育の必要性について意見を交わすことができた。</p> <p>○本事業での成果を活かし、他校でソーシャルスキルトレーニングの授業を実践した。他校での実践を通して、それぞれの生徒のニーズ把握の重要性と、社会的自立に向けた内容の「自立活動」が、多くの高校生に有用であるという認識を得た。</p>
---	---

5 研究開発の成果

(1) 実施による効果

①対象生徒への効果

キャリアデザインの授業は、生徒一人一人が、それぞれの課題に向き合い、安心して学ぶことのできる場であった。それぞれが障がい等の特性からくる課題を抱え、また多弁やかん黙傾向等のさまざまな生徒が混在する講座の中で、授業開始当初はぎこちなく見えた生徒同士がペア学習やグループ学習を通して、お互いを仲間として認めることができ、新たな人間関係を築くことができ、会話を交わすことなどなかった者同士が「おはよう」「ありがとう」などと自然と関わりを持つことができるようになった。また、普段の授業では十分に学ぶことができない社会性スキルや電話対応、プレゼンテーションなどの学習を行い、練習を重ねる中で「できる」「知っている」経験を積むことができ、一人一人の自信へと繋げることができた。さらには知識や経験が選択肢の幅を増やし、心の余裕にも繋がった。自分の感情をコントロールすることが難しくトラブルへと発展してしまう生徒もいたが、自分自身について考え、受容することができるようになるとその傾向は軽減した。また、社会的経験の乏しさから自立への不安感が強い生徒も多く、生徒一人一人の課題に応じて自立活動の内容を工夫することで、社会性も向上した。

②教員への効果

事業開始当初に比べ、教員全体の特別支援教育への関心は年々高まっている。それは「学校生活チェックシート」の回収率の上昇からも分かる。それに伴い、チェックシートに挙がってくる生徒数も増えた。これは単なる回収率の上昇のためではなく、教員が特別支援教育の観点から一人一人の生徒を観察できていることの表れであり、教員一人一人の特別支援教育に関する知識やスキルが高まっていることの表れだと考える。また、教員の中から「発達障がいの傾向やその対応策を知りたい」という声も挙がるようになり、教員研修では講義とは別に、本校の生徒について実態把握から対応策までを考えられる研修を取り入れた。本校の生徒の実態に即した研修内容にすることで、教員の研修参加率も向上した。

キャリアデザインの授業についても、模擬面接会や報告会等、他の教員が参観する機会も多かった。教室以外の学びの場で活動する生徒の姿を目にすることで新たな生徒

の実態を知る気づきの機会となった。そして、高等学校ではなかった「自立活動」の内容について多くの教員が知り、その有効性を実感することとなった。

③保護者等への効果

昨年度より2カ年、PTA総会において、本校の特別支援教育についてのリーフレットを配付し、本事業について説明を行った結果、PTA総会后に教育相談の申し込みがあり、保護者面談に結びついたケースもあった。また、今年度入学生や保護者を対象に「高校生活サポートカード」を配付し、記入・提出を依頼したところ、すべての保護者から提出があり、その記述から保護者のニーズを知ることができた。キャリアデザイン受講生の保護者には社会性スキルアンケート（保護者用）を依頼し、記入を依頼したところ、具体的な回答を得ることができた。また、保護者自身も自分の子どもの苦手なことや得意なことを意識でき、家庭での生活を見直す契機となったようである。また、平成28年度には教員研修への保護者の参加も得ることができ、この3年で少しずつ特別支援教育に関する保護者の理解も深まったと考える。

(2) 実施上の問題点と今後の課題

①問題点・課題

- ・支援ニーズの高い生徒に受講を勧めたが、進学を希望するため進学補習を受講したり、本人及び保護者の理解が得られないために、受講してもらえない場合があった。
- ・キャリアデザインの授業について、他の授業で紹介することがあまりできなかった。
- ・就職課や人権教育課、受講生徒の担任とは連携しながら「キャリアデザイン」の授業や本事業をすすめることができたが、それ以外の教員との連携は難しかった。
- ・週時程内の授業は1時間であるため、1単元で複数時間かかる場合は、間があくために、前時の復習や確認で時間が取られることもあった。
- ・教員、保護者を対象にした特別支援教育の研修を開催したが、保護者の参加は少なかった。
- ・就労支援や臨床心理士等の外部専門家や運営指導委員会委員の活用は進んだが、それ以外の専門機関との連携が進みにくかった。

②解決策

- ・キャリアデザインの成果を普段の授業にも活かしていくことができるよう、学んだ内容については校内で共通理解を図り、指導に統一性を持たせる。また、他の教科の授業でも「自立活動」の内容（姿勢・おじぎ・あいさつ・返事）を取り入れて、学校全体で取り組んでいくことが必要である。
- ・個々の生徒の障がい特性やニーズに即した対応策について、教員が共通理解を図り、個々の生徒に応じた支援の充実を図る。
- ・教員、保護者向け研修会については、年度当初に計画を立て、PTA総会等で特別支援教育だけではなく、研修会についてもその必要性を啓発する。
- ・巡回相談員を活用し、キャリアデザインの授業だけでなく、普段の授業の様子も見てもらい、支援を要する生徒の実態把握に努め、より生徒のニーズにあった外部の専門家を招へいした授業などを計画していきたい。